七月王政期の学校教育と文学

ボードレールを事例として

畠山 達

はじめに

19 世紀のフランスにおいて、中等教育（リセ、コレージュ）が文学の生成に果たした役割を問うことは決して無駄なことではないだろう。しかし、教育と文学の関係を明確にすることは決して容易な作業ではない。というのも、この主題は、複雑な文化背景に根を下ろした教育の内容と歴史に対する正確な知識を必要とし、社会史などにも関連する学際的研究だからである。したがって、研究領域が多分野に跨るため、巨視的な視点を失うことなく、研究の焦点を絞ることが難しい。さらに、実際の文学作品と当時の教育内容の因果関係を明らかにするには、細かい実証的な検証が必要であり、例えそれが立証できたとしても、今度は個々の詩人や作家の特異性を、教育という一般的な枠組みの中に押し込めてしまうという危険性もある。

以上の困難を踏まえたうえで、本論では、まず教育と文学の関係を探る基本的な手がかりと意義を簡潔に示し、ついでこの学際的主題における先行研究の流れを概観したのち、シャルル・ボードレールが学校教育を受けた七月王政期を具体的な事例として、19 世紀の教育制度の枠組みとその主要な特徴について最低限必要となるはずの認識を得ることを目指したい。

I 教育と文学の関係

教育と文学作品の創造がどのような関係にあるか検討することは、微妙にして困難な作業であるが、手がかりがないわけではない。今日、我々が手にすることのできる 19 世紀の文学作品の作者のほとんどが、時期、場所、期間の違いこそあれ中等教育を受けている。これは当然のことだとも言える。というのも、実際には詩人の養成が中等教育の目的ではなかったにしろ、ラテン語模擬演説を頂点とする人文教育の体系をそなえた中等教育は、当時にあって文学作品を書くうえで必要な技術を学びうる唯一の環境だったからであ

る。同時に、少数の例外を除いて、文筆業へ進むことを許す文化的、経済的な条件は、中等教育を享受できる条件とほぼ一致もしていた。

19 世紀の古典的人文教育は、もっぱらギリシア・ラテンの文学を範とした「書く技術」を教える教育だったと言っても過言ではない。低学年の頃から、初歩的なラテン語仏訳（version）、フランス語のラテン語訳（thème）が始まり、学年が進むにつれて、ラテン語韻文（vers latins）、ラテン語及びフランス語作文（narration latine et française）が加わり、最終的には、ラテン語とフランス語による模擬演説（discours latin et français）に至る段階的な課題が準備されていた。この中では、フランス語韻文が教えられることは稀であり、ラテン語のフランス語に対する優位は揺るぎないものであったが、生徒はフランス語をまったく書かなかったわけではない。一部の例外を除いて授業はすべてフランス語で行われ[1]、生徒には自習の時間に授業内容をそのまま別のノートに書き写す宿題が課せられた。また、低学年から頻繁に行われたラテン語仏訳の訓練はラテン語ではなく、フランス語の練習であると認識されていた。このような訓練を経て、生徒は古典語と現代語に対する独特な言語感覚を養い、このことが後の作品に少なからず影響を与えていると思われる。詩人ないし作家が、具体的にどのような教育と練習を介して言語、修辞学、さらには作詩法などの技術を学んだのかを理解することによって、学校教育と文学の関係をさぐることは、文学創造の基層に迫るという点において、意義深いものとなるだろう。

しかし、学校教育は、技術や知識の伝達という役割ばかりを担っていたわけではない。同時に、教室で使用される教科書の選定や試験題目の決定などを通じて、古典と呼ばれる規範文学の創造にも深く寄与した。フランス革命に先駆けて、教育機構からその内容に至るまで深い影響を与えたイエズス会の追放が 1762 年に決定された後、国家の教育に果たす役割が増大する。そして、国家による教育の支配が進むなか、政治体制やその方針が教育内容に反映され、ひいては文学の創造に影響を及ぼすようになる。生徒が規範としたテクストは、道徳的、政治的、そして教育的理由から、注意深く取捨選択され、時には古典作品が改作されたものであった。それは安全な教養として、中等教育を経て流布されたものであり、このような一般教養に対して、学校外で形成される文学がどのような反応を示したかを検証することも有意義であろう。19 世紀以降、国家が教育内容に干渉するようになった結果、文学教育も政治的に利用されるようになり、このことが 19 世紀の文学に深く影響を

[1] 1821 年から 1829 年のあいだ、哲学級はラテン語で行うことが義務付けられた。

及ぼしたと考えられるのである。

ユゴーの修辞学に対する宣戦布告、青年フランス派の反動、芸術の社会的効用を否定する芸術至上主義など、今日どの文学史の教科書にも掲載されている運動は、当時の文脈からすれば、学校教育で徹底的に教え込まれた文学に対するアンチ・テーゼという側面を持っていた。ユゴーがロマン派の新しい文学運動を「革命」と表現したように、それは国家に利用される文学に対する政治的な解放運動であったとも考えられる。そして、当時学校教育において正統と認められていた文学のありかたは、反対派との抗争に敗れた結果、今日ではほぼ忘れられている。

しかし同時代の観点から見れば、規範化の運動は活発であった。教師による教師のための新聞『ル・リセ』などの文芸欄は、古典文学の新訳などに好意的な書評を掲載する一方、『エルナニ』やロマン派に対しては辛辣な批評を展開しており、学校で教えられる文学を擁護しようとする姿勢が顕著であった。また、公認教科書として認可されていた羅仏辞書やラテン語韻文法の著者で、ラテン語学の権威だったルイ・キシュラが 1839 年に出版した『フランス作詩法』も規範化への志向の現れとして理解できよう。さらに、国家の主張する文学規範は、アグレガシオンや学士号の試験題目などにも顕著に現れている。一つだけ例を挙げるなら、1866 年のアグレガシオンのフランス語作文の題目は以下のようなものであった。

> ギリシア悲劇にすでにみられ、ラシーヌが見事に遵守し、近代作家が蔑視する三一致の法則は保持される価値があるかどうか検討せよ[2]。

もちろん、このような質問に対して否定的に答えることは許されなかったはずである。ロマン派などに代表される新しい文学が文学史の表側だとすれば、学校側の掲げた規範的な文学は、その裏側にある。したがって、学校教育の内実を検証することは、この裏側の文学を再発掘することを意味する。こうして文学史を裏側から眺めることによって、表側の文学についてこれまで見過ごされがちな側面のあることが明らかになるのではないだろうか。

---

[2] Cité dans Pierre Albertini, « Le *cursus studiorum* des professeurs de lettres », *Histoire de l'éducation*, n° 45, janvier 1990, p. 63.

II 先行研究の概観

このように中等教育は、言語、修辞学、作詩法などの伝達のみならず、文学規範の創造とも深い関係にあり、二重の意味で文学の生成とは切っても切れない繋がりをもっている。この分野における研究の必要性は、すでに半世紀以上前から訴えられてきたが、近年になって様々な方面からの研究が充実してきた。

「教育と教材の歴史は、過去の作家のことを徹底的に理解しようと欲する人たちによって、あきれるほど顧みられていない[3]」と、アンリ・ペールによってこの分野における研究の欠落が最初に指摘されたのは 1941 年のことであった。その 35 年後、ジャン・エラールは以下のように記した。

> もしすべてのまともな歴史が、教育史を足場にすべきであるというのが正しいならば、少なくとも近現代の文学研究者は研究の対象に事欠くことはない。公の授業計画と公教育、テストや選抜試験の問題、賞品授与記録、公開講座、ノート、受けた教育や与えた教育についての個人的証言、等があるからだ[4]。

しかし、1980 年になってもなお、ジャン・モリノは、修辞学が教育において占めた位置、文学との関連、そして文化の形成における役割が不明なままであると指摘したうえで、「実際、我々は 19 世紀における教育についてたいしたことは知らない[5]」と述べた。

この方面における研究の不備は、従来から教育史の研究家も指摘してきた。1968 年、アントワーヌ・プロストは、教育研究が実践に対して理論を好み、「我々の知る限り、19 世紀の教育学が総合的な研究の対象になったことはまだない[6]」と述べている。20 年後、同様の趣旨で、ピエール・カスパールが制度、政治、イデオロギーの側面に偏重し、教育の中身そのものを等閑視してきた従来の教育史研究のありようについて改善を訴えた[7]。この論文が掲載された同じ雑誌特集号の中で、アンドレ・シェルヴェルも教育の内容につい

---

[3] Henri Peyre, *L'Influence des littératures antiques sur la littérature française moderne, État des travaux*, New Haven, Yale University Press, 1941, p. 9.

[4] Jean Ehrard, « La littérature française du 18e siècle dans l'enseignement secondaire en France au XIXe siècle : le manuel de Noël et La Place, 1804-1862 », *Studies on Voltaire and the Eighteenth Century*, vol. 152, 1976, p. 663.

[5] Jean Molino, « Quelques hypothèses sur la rhétorique au XIXe siècle », *Revue d'histoire littéraire de la France*, mars-avril 1980, p. 181-194.

[6] Antoine Prost, *Histoire de l'enseignement en France 1800-1967*, Armand Colin, 1968, rééd. 1979, coll. U, p. 16.

[7] Pierre Caspard, « Introduction », *Histoire de l'éducation*, n° 38, mai 1988, p. 4.

ての研究が疎かにされてきた点を喚起し、「いくつかの例外を除いて、その重要性がまったく文学研究家に無視されてきた点がある。それは学校教育と文学活動の関係である[8]」と述べて、文学研究においても教育との関連が看過されてきたことを指摘した。しかし、こうした提言を承けて、この分野の研究がただちに進んだわけではなく、1997 年になってもなお、マリー=マドレーヌ・コンペールは、「フランス文化史と密接な関係があるにもかかわらず、古典的人文教育の具体的な中身は、ほとんど手がつけられていない。教育の中身に関しては不明の部分が多く、教育を提供した幾つかの学校の歴史の他に、基本的な教育方針と教育計画、公的法規の大筋しか我々は知らない[9]」と、改めてこの分野の研究を促そうとした。

ただし、このあいだまったく研究が進まなかったわけではない。教育史研究の側からは、特に 1980 年代以降、「教育史研究課（Service d'Histoire de l'Éducation）」によって運営された学会、定期刊行物と教育関連の書誌の他に、教科書の出版年代順の総覧、中等教育の教師の便覧などが刊行され、その功績は非常に大きい。この研究課は、1970 年 7 月、当時の文部大臣オリビエ・ギシャールが新しく設置した役職「教育史担当高官（Haut fonctionnaire chargé de l'histoire de l'éducation）」に、大学区長を務めていたモーリス・バエンを任命したことを前身としている。バエンを中心に専門家による委員会が組織され、教育史に有益な資料の保存、国立古文書館との連携、教育史研究の奨励が企図された。1970 年代は全般的に歴史研究が大きく注目された時期であり、歴史に関する官民の委員会が多数組織されたが、教育研究もその流れに掉さすものであった。いずれにしても、公的資金と国家の後ろ盾を得て、教育史研究は活性化の時期を迎え、前述のごとく 1977 年、「教育史担当高官」は「教育史研究課」に姿を変え、フランス文部省所管の国立教育研究所（INRP）の一部署となり、教育史研究の中心的存在として現在もその活動は続いている。

文学研究に目を転じると、ルネ・ジャザンスキー、ジェロー・ヴァンザック、ジャン・ブリュノー、ダヴィッド・ペローなどの研究にみられるように、伝統的には、伝記研究の一環として学校教育の問題が取り上げられる例が多かった[10]。また、有名な作家の場合は、運よく学生の頃のノートが残されて

---

[8] André Chervel, « L'histoire des disciplines scolaires. Réflexions sur un domaine de recherche », *Histoire de l'éducation*, n° 38, mai 1988, p. 118.

[9] Marie-Madeleine Compère, « La tardive constitution de l'enseignement des humanités comme objet historique », *Histoire de l'éducation*, n° 74, mai 1997, p. 187.

[10] René Jasinski, *Les Années romantiques de Th. Gautier*, Vuibert, 1929 ; Geraud Venzac, *Les*

いる場合もある[11]。ただし、学生時代の成績や知的傾向とその後の作品を関連づけることはあっても、作家自身が受けた具体的な教育の中身にまで立ち入った研究は少ない。他方、今や古典となって久しいピエール・モローの研究の他に、ロジェ・ファイヨルによって教科書における作家や詩人の受容の変遷に関する研究が行われ、1960年代から顕著になった修辞学研究の復興にともなって1980年にマルク・フュマロリの『雄弁術の時代』が公刊され、アルレット・ミシェルによってロマン派と修辞学の関係を探る研究も1999年に上梓された[12]。また日本でも、東京大学文学部から三度に亘って科学研究費の研究報告という形で修辞学と文学の関係を探る研究がなされている[13]。それ以外にも、19世紀の学校教育の内容を中心にしてジュール・ヴァレスの文学観と文体を考察した論文と、ボードレールとラテン詩との関連を扱った、コリーヌ・サミナデイア=ペランによる近年の研究は最も注目に値する[14]。

この他、学際的研究としては、歴史家ピエール・ノラの主導で1984年から1992年にかけて出版された『記憶の場』にも教育に関する論文が幾つか収録されている[15]。さらに「文学の社会学」を提唱し、文学の果たす社会的役割を考察したピエール・ブルデューとルネ・バルビエらの流れを汲んで、第三共和制以降の文学教育に着目したジャン=フランソワ・マソルの著書が2004年に刊行された[16]。以上は網羅的な挙例ではなく、内容の面からも一括りに

Premiers Maîtres de Victor Hugo, Bloud et Gay, 1955 ; Jean Bruneau, *Les Débuts littéraires de Flaubert*, Armand Colin, 1962 ; David Pellow, *Charles Baudelaire, The Formative Years*, Nashville, 1971.

[11] 例えば、ランボーのノートについては、Suzanne Briet, « Le Cahier des dix ans », *La Grive*, n° 90, 1956 ; Jean-Luc Mercié, « Rimbaud avant Rimbaud », *Nota bene*, n° 12, printemps 1984, p. 15-68.

[12] Pierre Moreau, *Le Classicisme des romantiques*, Plon, 1932 ; Roger Fayolle, « La Poésie dans l'enseignement de la littérature : Le cas de Baudelaire », *Littérature*, octobre 1972, p. 48-72 ; « Victor Hugo dans les manuels scolaires », *Europe*, mars 1985, p. 190-202 ; « Les *Confessions* dans les manuels scolaires de 1890 à nos jours », *Œuvres et critiques*, t. III, *Lecture des Confessions de Jean-Jacques Rousseau*, 1978, p. 63-86 ; Marc Fumaroli, *L'Age de l'éloquence* (1980), 3e éd., Genève, Droz, 2002 ; Arlette Michel, « Romantisme, littérature et rhétorique », *Histoire de la rhétorique dans l'Europe moderne*, PUF, 1999, p. 1039-1070.

[13] 『詩学・修辞学・批評――フランスにおける文学観の変遷』、東京大学文学部、1989年。『レトリックとフランス文学――伝統と反逆』、東京大学文学部、1994年。『規範から創造――レトリック教育とフランス文学』、東京大学文学部、1997年。

[14] Corinne Saminadayar-Perrin, *Modernités à l'antique, parcours vallésiens*, Champion, 1999 ; « Baudelaire, poète latin », *Romantisme*, n° 113, 2001, p. 87-103.

[15] 例えば、Daniel Milo, « Les classiques scolaires », *Les Lieux de mémoire*, t. II, *La République*, Gallimard, édition Quatro, 1997, p. 2085-2130.

[16] Jean-François Massol, *De l'institution scolaire de la littérature française (1870-1975)*,

はできないが、文学のみならず社会学の側からも、文学生産にとって教育の果たす役割が、特に近年注目を集めつつあることを示すには十分であろう。

このように、久しく欠落が指摘されてきた19世紀における教育の内実と文学についての研究に、1980年代以降、教育学と文学のみならず様々な方面からの成果が見られるようになった。教育学については、理論から実践へと研究対象が変わったことによって研究領域に大きな変化がみられた。それは、1970 年代に起こった歴史観の革新と国家による古文書保存運動にともなう歴史研究の進展に大きく影響された結果であったと言えよう。また、文学研究においては伝記研究の他に、1960年代以降の修辞学の復興、間テクスト性の注目、受容史の研究、そして社会学的観点からの研究の広がりなどの影響を考えることができる。それにしても、上述のコリーヌ・サミナデイア=ペランの研究の他には、19 世紀における文学と教育の関係を真正面から扱い、両分野間の橋渡しとなるような基本文献は、未だにほとんどないが現状である。

本研究の最終的な目的はその空隙を少しでも埋めることだが、中等教育と文学の生成の関係という広範な主題の含む問題点を、本論においてすべて解明することはできない。それゆえ、ここでは初歩的な地点に立ち戻り、文学テクストからは一時的に離れることになっても、19世紀の教育制度の内実を素描しておきたい。ただし、19世紀の教育と一言で言ってもその内情は多様で、時代や地方によって必ずしも均質な教育がなされていたわけではない。あまりにも大きな一般的見解に陥ることを避ける意味でも、個別の例に即して中等教育の一面を探る必要がある。

そこで以下では、冒頭に述べたように原則として対象をボードレールに限定し、「近代詩の父」と呼ばれる詩人がどのような社会的状況の中で教育を受けたか、その大枠を記しておきたい。これは基本的な作業ではあるが、一作家の限定的なテクスト研究に入る前に、教育の社会的状況を知ることは文学研究にとって重要な作業である。日本とフランスの教育制度が大きく異なっており、誤解されやすい点や、基本的な語彙の面でも注意を要する点が多々あることを考えれば、以下に示す概論はこの分野における研究の礎石となりうるであろう。

Grenoble, ELLUG, 2004.

Ⅲ 七月王政期の教育機構

ボードレールは、いつ、どこで、どのような中等教育を受けたのか。1831年10月3日、10歳のボードレールは、パリにある寄宿寮（パンション）ブルドンへ入れられると同時に、シャルルマーニュ王立コレージュの第七年級へ入学する。それ以前にどこかの私立学校へ通っていたことが推察されているが、確証はない。絹織物工による反乱の鎮圧のためにリヨンに送られていた義父オーピックの許へ母親と一緒に向かうことになったため、ボードレールはシャルルマーニュ王立コレージュには1学期しか在籍しなかった。そして、1832年1月から1836年までの4年間リヨン王立コレージュに通うことになる。その後、パリへ戻るとボードレールは、1836年3月1日からルイ・ル・グラン王立コレージュの第三年級に転入する。そして、1838年4月に教師に対する不服従の理由で放校されるまでの約3年間、ここで教育を受ける。途中で放り出された哲学級を終えるために、今度はサン=ルイ王立コレージュへの転入が認められ、1839年8月12日にバカロレアに合格する。つまり、ボードレールは、七月王政下の1831年から1839年の8年間、パリとリヨンで中等教育を受けたことになる。それは、「教育の自由」を主張して自由主義者と教権主義者たちが国家に対して激しい争いを繰り広げる一方で、着実に就学人口が増加し、国公立の中等教育の権威が向上し、一部の研究者によると、19世紀の中で最も充実し、最も調和の取れた古典教育を提供した時代であった[17]。

19世紀の学校教育を語る際、第一帝政から始まり、普仏戦争の敗北の後、第三共和制に入って抜本的な改革が行われるまでを一つの時代区分とみなすことが一般的である。本論でも「19世紀の学校教育」と言うときは、基本的にはこの時代を指している。この区分によると七月王政はちょうどその中心に位置しているわけである。ナポレオンによって1802年に中等教育の頂点に位置するリセが創立されて以降、ジュール・フェリーによって教育の世俗化と共和化が図られるなか、1880年にバカロレアの試験科目からラテン語模擬演説が廃止されるなどの、一連の改革が行われるまでは、曲がりなりにも古典語教育を主軸とした教育方針が変わることはなかった。フランス革命は少なくとも学校教育の面では、断絶をもたらすことはなく、寧ろ18世紀以来の教育を継続させたと言える。この期間は、革命後の混乱を収拾し、啓蒙主義によってもたらされた自由主義的な思想を鎮火することが教育政策における

[17] Jean-Jacques Weiss, « L'Éducation classique et les exercices scolaires : le discours », *Revue des deux mondes*, 15 septembre 1873. p. 394-395.

主要な課題であった。一言で言うならば、革命の再発予防、社会秩序の安定が教育の支柱の一つとなっていた。このような政策は、教育の目的、内容、規律、そして機構にまで反映された。中等教育で、旧体制を髣髴させる古典的人文教育が採用された理由の一つもここにあった。ナポレオンからジュール・フェリーまで、つまり19世紀初頭から1880年までの時期が「教育のアンシャン・レジーム[18]」と呼ばれる所以である。先に、ユゴーが新しい文学を「革命」に準えたことに触れたが、文学における「アンシャン・レジーム」の存続は、当時の意識からすれば自明のことであっただろう。そして、ボードレールが教育を受けた七月王政は、そのアンシャン・レジームの一つの絶頂期でもあった。

1. 中等教育の呼称と年級

混乱を避けるために、当時の教育制度について幾つか基本的な説明をしておくべきだろう。まず、コレージュとリセという呼称だが、4年制コレージュの後に3年制のリセが続く今日の中等教育とは違い、19世紀では政治体制によって呼称が変わるだけで、一つの教育課程を指している。つまり、当時「リセ」または「コレージュ」は、7年から10年に及ぶ一貫した中等教育施設であった。革命前に使用され、旧体制を髣髴させる「コレージュ」という呼称を嫌ったナポレオンが同じ教育施設を「リセ」と改称したことに始まり、その後、第二次王政復古から七月王政が終わるまで「リセ」は、その旧名「コレージュ」を取り戻す。そして、第二共和制以降、改めて「リセ」の呼称が復活する。さらに、政治体制によって「帝国」や「王立」などの形容詞が加えられ、学校名そのものが変更させられる場合もあった。ルイ・ル・グラン校に限って言えば、第二共和制のあいだと第三共和制の初期はリセ・デカルトへと名称を変更させられた。また、公立コレージュ（collège communal）と呼ばれる市町村の管轄下にあった学校もあったが、これについては後述する。いずれにしても、政治体制の変遷にともなって学校名は目まぐるしく変えられる。この事実だけでも、中等教育施設が政治的にも重要な役割を演じていたことが窺われるだろう。

次に学年の呼称だが、当時の中等学校は基本的には第六年級から開始され、第五年級、第四年級と減算式で進み、第二年級の次が修辞学級と呼ばれ、最後に本来は二年間の哲学級があった。このような呼称は元来イエズス会のコ

---

[18] Pierre Albertini, *L'École en France, XIXe–XXe siècle, de la maternelle à l'université*, Hachette, 1998, p. 3.

レージュにて使用されていたものであり、正確にはルイ 18 世の治世以降（1814 年の 9 月 28 日のアレテ）復活したものである。このように中等教育の学年数は 8 年であったが、一般的には 9 年から 10 年と考えられていた。というのも、大きな学校には年少者のための第八年級や第七年級も付設されており、コンクール・ジェネラル（パリとヴェルサイユの中等学校の生徒によって行われる選抜学力テスト）のために、修辞学級を自発的に留年する生徒もおり、理科系の別コースを併設している学校もあったので、必ずしも全員が決まった年数の教育を受けるわけではなかった。また経済的理由などで最終学年まで進めずに、途中で学業を中断する生徒も多数いた。

2. 初等教育と中等教育・社会秩序安定のための垣根

では、この中等教育は教育制度全体の中でどのような位置づけだったのか。政府の学校と言われるグランドゼコールや職業専門学校などを除くと、七月王政期のフランスには、大きく分けて三つの教育課程があった。(1) 読み書き計算と数理問答が中心の初等教育、(2) 古典的人文教育を中心とした中等教育、そして (3) 神学、法学、医学、数理科学、文学の五つのファキュルテを擁する高等教育である。ボードレールがバカロレア合格後に、御多分に洩れず法学部へ登録したように、中等教育を修了した者が高等教育へ進む道は一般的なものであった。ただし、当時の高等教育の役割は今日のそれとは大きく異なり、学位審査（バカロレア、学士、博士）や試験（コンクール・ジェネラル、グランドゼコール選抜試験、アグレガシオン）が主な任務で、一般向けの公開講義があっても、それぞれの講義に履修登録をする学生がいたわけではないことを考えれば、中等教育のみが文学教育を担っていたと言っても過言ではないだろう。というのも、初等教育と中等教育のあいだに連結関係はなく、それぞれ独立した教育課程を構成していたからである。これが 19 世紀の教育制度の大きな特色の一つである。

まだ義務教育の存在していなかった当時、長い教育期間と高額な教育費を必要とする中等教育に子弟を通わすことができたのは、一部の裕福なブルジョワだけであり、労働者階級の子弟は初等教育へ通っていた。現実は多少異なることは後述するが、こうした差別化は、少なくとも制度的に意図されたことの結果である。初等学校は修道会や個人、または市町村によって運営されていた。1833 年のギゾー法によって初等教育が自由化され、コミューンに初等学校の設置が義務付けられたものの、国からの補助金がなかったという意味で、すぐに効果を挙げるものではなく、実際には現状を承認する意味合

いのほうが強かった。そもそも、初等教育の運営における国からの援助が占める割合は 1850 年に至っても僅か 6.5 パーセントであった[19]。また確かに 1841 年から 1863 年にかけて、初等学校を有するコミューンが全体の 47 パーセントから 72 パーセントに増えたものの、そのうち学校として十分に機能していると認められたのは 59 パーセントであった。国にとっての最優先課題は初等教育にはなく、官吏や将校、または弁護士や医師を養成する中等教育にあった。

実際、中等教育を受けることができたのは、19 世紀を通じて学齢男子全体の 5 パーセントに満たないとされている。その数は、七月王政期には 3 パーセントにも達していない[20]。この限られたエリートの中から、詩人や作家も誕生したのである。当時は、まだ都市型の生活形態が完全には成立しておらず、都市でも地方でも、労働者階級にとっては、子供が重要な労働力だったことも忘れてはならないが[21]、政府は中等教育を敢えて有料にすることで、親の社会階級とその経済力を基準にした線引きを行った。このような線引きは、革命前の教育制度から得られた教訓であり、何よりも社会秩序の安定を願う政府の方針であった。労働者階級には短く簡単な教育を与え、デステュット・ド・トラシーの言う「知的階級[22]」には長く専門的な教育を与えるべきだという方針は決して新しいものではなく、庶民や女性に教育を与えることは常に憚られてきた。視学総監だったジョゼフ・イザールは、ラ・シャロテの主張を援用し、社会秩序を安定させるために、二つの階級にそれぞれ別の教育を与えて社会を二分割することの正当性を以下のように訴えた。

> 庶民までも教育を受けたがっている。農夫や職人までも生活費のあまりかからない小さな町のコレージュへ子供を出している。そして、子供たちが父親の職業を軽蔑することしか教えない悪質な教育を受けた後、彼らは聖職者の道を選ぶ。または司法の仕事につき、社会に対して有害な人物になる[23]。

---

[19] Pierre Albertini, *L'École en France, XIXe – XXe siècle, de la maternelle à l'université*, Hachette, 1992, p. 10.

[20] *Ibid.*, p. 34.

[21] 8 歳以下の子供の雇用を禁止し、工場や製造所で働く 8 歳から 12 歳までの子供の一日の労働時間を 8 時間以内と決めた法律が制定されたのが 1841 年のことである。

[22] Destutt de Tracy, *Observation sur le système actuel d'instruction publique*, Panckouck, an IX (1800), p. 2.

[23] La Chalotais, *Essai d'éducation nationale et Plan d'études pour la jeunesse*, 1763, p. 27. Cité partiellement dans Joseph Izarn, *Exposé de l'état actuel de l'instruction publique en France*, Dentu, 1815, p. 115-116.

七月王政期に文部大臣であったギゾーも同様の思想の持ち主であった。彼によれば、フランス革命は、あまりに貧弱な初等教育とあまりに充実した中等教育に起因していた。というのも「1789年には、読むことのできる貧しい人があまりにも少なく、レトリックを学んだ者があまりにも多かった。不完全な知識が、レトリックを学んだ者たちの野心に火をつけて、他の職をあてがわずに父親の仕事を軽蔑することを教え[24]」たからだった。ギゾーは、初等教育はすべての子供に対する国の負債であると考えていたが、同時に、社会秩序の安定を保証する装置としても捉えていた。いずれにしても学費が大きな壁になって、初等教育に甘んじる労働者の子弟は少なくなかった。

では具体的に中等教育の学費はどの程度だったのか。それは後述する中等教育の段階にもよるが、学費の最も高いパリでは、王立コレージュの寄宿舎の費用が年間1000フランと定められていた。これは当時の熟練工の平均年収に相当する。また地方の王立コレージュの教師の年収は1000フランから2000フランだったことを考えれば、いかに学費が高額だったかが理解できよう。これに加えて、国公立、私立に関わりなく、中等教育を行っている寄宿寮の費用の20分の1にあたる一種の負担金を大学機構へ学期毎に支払う必要があった[25]。パリの学校であれば、1000フランから教科書代の100フランを引いた900フランの20分の1、つまり45フランが負担金となる。ボードレールの実父はその晩年、合計7200フランの年金を受けており、その莫大な遺産で、息子の授業料の一部が支払われた。記録によると、1828から1832年、1833年から1835年、1836年から1839年に、それぞれ1200フラン、1500フラン、2000フランがボードレールの学費の為に遺産から引き落とされている[26]。

初等教育と中等教育は経済面でのみ区分されていたわけではない。教育内容においても、古典語教育、特にラテン語教育の有無で線引きがなされていた。中等教育がラテン語を中心とする教育内容だったのに引き換え、初等教育では基本的には、読み書き計算、フランス語の基礎、度量衡と特に宗教教育が重んじられ、ラテン語は注意深く取り除かれていた。第一に、庶民にとってラテン語は生活上に必要がなく、上記の教育こそが最も必要とされていたことは言を俟たない。しかし、同時に、古典語の排除も、アンシャン・レ

---

[24] François Guizot, *Essai sur l'histoire et l'état actuel de l'Instruction publique en France*, Maradin, 1816, p. 83.

[25] この税制は中等教育の自由を認めた1850年のファルー法に先立って1844年に廃止される。

[26] Jean Ziegler, « La Fortune Baudelaire. Historique » dans Baudelaire, *Correspondance*, éd. Claude Pichois et Jean Ziegler, Bibliothèque de la Pléiade, 1973, t. I, p. LXV-LXVI.

ジームから汲まれた教訓であった。実際、フランス革命以前、初等学校において一部の優秀な生徒にラテン語が教えられ、彼らがある程度の年齢になると大きな都市のコレージュに送られることがあり、このことによって社会の混乱がもたらされたと判断されたのである。ラテン語を学ばせないことは、庶民の中等教育への進出を阻む狙いがあった。初等学校の中で古典語を教えたい場合は、特別の申請を行う必要があり、古典語の授業を受ける生徒は、他の生徒と同じ授業を受けることできず、先に述べた負担金を大学機構に支払う義務が生じた。

1833 年のギゾー法でもやはり、初等教育の内容から古典語が除かれているが、そこには上のような理由があったと考えられる。ギゾー自身は、古典語教育の中身と現代社会のあいだにはあまりに大きな隔たりがあることを指摘し、その教育方法について疑問を差し挟むことはあったにせよ、古典語の優位と必要性を疑うことはなかったし、学校でギリシア・ローマ文学に親しむことは非常に重要であり、それらを修めなかった者は「知性に関しては成り上がり者にすぎない[27]」と明言している。

19 世紀にラテン語教育不要論が過熱するなか、中等教育におけるラテン語の地位を揺ぎ無いものにしていたのは、嘗て知識人たちの共通語として認識されていたラテン語の権威であり、何よりも西欧における長い人文教育の歴史と古典文学の豊かな遺産であった。そのため「教養＝古典文学」という図式が上流社会の常識でもあったと考えられる。他にも一部の教権主義者によって俗語であるフランス語が蔑視され、「真の言語」であるラテン語が優遇されたことも指摘しておこう。また、ラテン文学は道徳涵養に有用である、あるいは知的体操として必要であると訴えられたこともあった。同時に忘れてならないのは、中等教育からラテン語教育を撤廃することは、初等教育と中等教育のあいだに築いた垣根の撤去を意味していたことである。19 世紀を通じて頑なに古典語教育の擁護が唱えられた背景には、このような社会秩序の安定に対する一部の懸念もあった。

ラテン語教育を社会階級の線引きに明確に利用しようとしたのは、近隣諸国の中でもフランスだけであった。このことがフランス社会における、ラテン語の優越的な地位を形成する一因にもなった。19 世紀の人々にとって、子供に中等教育を受けさせることは、高額な学費を払ってラテン語を学ばせることを意味していた。当時ボードレールのように、ラテン語で詩を書けることはエリートの証であった。また中等教育にフランス語教育やフランス文学

---

[27] François Guizot, *Instruction publique – Éducation*, Belin, 1889, p. 283.

が浸透するまで長い時間を要したのは、このようなラテン語重視政策の影響もあったと考えられる。このように、19 世紀の学校教育は、経済面と教育面で二つの社会階級を明確に分割することを教育の目的の一つにしていたことは確認できた。しかし、現実には、経済的繁栄を背景に、特に七月王政期の頃から新興ブルジョワの子弟が中等教育へ通い出し、「二つの階級のための二つの教育課程」という原則が厳密には遵守されなくなる部分もある。そして、このことによって教育内容の見直しも迫られるようになるのである。この点に入る前に、中等教育の構成について触れておくべきであろう。今まで中等教育と一括りにして述べてきたが、実際には都市や学校、運営者によって教育内容もそのレベルもまちまちであった。

3. 国公立の中等教育

国公立の中等教育は、ピラミッド型の組織構造であった。このピラミッドは大きく 3 段階に区分けされており、その頂点に位置していたのが、権威も学費も報酬も最も高かったパリの 5 校の王立コレージュ（ルイ・ル・グラン、アンリ四世、サン=ルイ、シャルルマーニュ、ブルボン）であった。これに引き続く位置に、地方にある 41 校の王立コレージュが置かれていたが、その内部でも、第一級（6 校）、第二級（19 校）、第三級（16 校）と区分けがされており、その等級によって学費、寄宿代、校長を始めとした教師らの給料も定められていた。最後に、国公立中等学校のピラミッドの底辺にあったのが、27 のアカデミーに散っている 312 校の公立コレージュである。これらの学校は王立コレージュと違って国の管轄ではなく、市町村の財源に頼っており、修辞学級や哲学級のない小さな公立コレージュも多くあった。視学は生徒数、教育レベル、設備などの報告書を提出し、その内容によっては階位の変更が認められ、昇級によって報酬も上がるので、教師らの労働意欲を高めるうえでこの序列制度は機能していた。ちなみに、ボードレールが 4 年間通ったリヨンの王立コレージュは、ヴェルサイユ、ボルドー、マルセイユ、ルーアン、ストラスブールの 5 校と並んで第一級に属していた[28]。ボードレールは当時のフランスにある最高レベルの教育を受けていたことになる。

これらの学校には、その階位に応じて教育水準にも違いがあった。まずパ

---

[28] 地方の王立コレージュや公立コレージュは昇級制度があるため年度によって数が異なる。ここでは、当時の文部大臣ヴィルマンがルイ=フィリップへ提出した以下の調査報告書を参考にした。なお、この資料はフランスの中等教育における初めての公の調査報告書である。Ministère de l'Instruction publique, *Rapport au Roi sur l'instruction secondaire*, Imprimerie royale, 1843, p. 11, 29, 70, 71.

リの王立コレージュと地方の王立コレージュとのあいだには、明確な差が設けられていた。パリと地方の王立コレージュのあいだで生徒の移動があった場合、パリから地方へ行く場合は、学年が繰り上げられ、その逆の場合は一年から二年、場合によっては三年下のクラスへ転入することになっていた。これは革命以前からの風習だったようである。ボードレールもパリのシャルルマーニュ王立コレージュでは、一学期しか第七年級に在籍していなかったにもかかわらず、リヨンでは第六年級へ転入した。また逆に、リヨンからパリへ戻った際はすでに第二年級に在籍していたにもかかわらず、第三年級を繰り返さなければいけなかった。それは、ボードレールが証言するように「パリでは一年早く数学が始まり、リヨンでは第三年級で学ぶことを第四年級で、リヨンでは第二年級で学ぶことを第三年級で学ぶ[29]」ためでもあった。ボードレールの他にも例は多くあり、サント=ブーヴやエルネスト・ラヴィスも地方からパリへ転居した際に学年が繰り下げられた。

パリと地方のコレージュの差を決定付けるものに、コンクール・ジェネラルがあった。これは、1747 年に最初の表彰式が行われ、革命後の混乱に一時中断されたものの、第一帝政に入って 1803 年に復興された選抜試験である。七月王政期、この試験はパリにある 5 校の王立コレージュ、2 校の私立コレージュ（ロランとスタニスラス）とヴェルサイユの王立コレージュに所属する生徒によって毎年度末に行われ、地方のコレージュの生徒には参加する資格がなかった。

この試験は非常に権威が高く、政府の官報だった『モニトゥール・ユニベルセル』などの主要新聞では、毎年度末、どこの学校の誰が表彰されたかが記載された。修辞学級と哲学級で一等賞をとった生徒には、高等師範学校への門が開かれ、科学部門で一等賞をとった生徒は高等師範学校か理工科学校を選ぶことができた。そのためか、賞を取るために修辞学級を自主的に留年する生徒も多かった。さらに一等賞を取った生徒は文部大臣主宰の晩餐に招待され、ルイ・ル・グランでは生徒の肖像画が面会室に飾られた。それは学校の名誉をかけた競争だった。

パリで行われる教育の目的はコンクール・ジェネラルで賞をとれる生徒を育成することにあったと言っても過言ではないほどであった。そのため、それぞれの学年に課せられた試験科目を確認するだけで、当時の教育内容の大枠を窺うことが出来よう。ボードレールが中等学校に属していた時期、文系

---

[29] Lettre à Alphonse Baudelaire, le 25 février 1836, Baudelaire, *Correspondance*, éd. Claude Pichois et Jean Ziegler, Bibliothèque de la Pléiade, 1973, t. I, p. 37.

の主たる試験は以下の内容であった[30]。

第六年級：仏語羅訳、羅語仏訳
第五年級：仏語羅訳、羅語仏訳、希語仏訳
第四年級：仏語羅訳、羅語仏訳、希語仏訳、仏語希訳
第三年級：仏語羅訳、羅語仏訳、希語仏訳、仏語希訳、羅語韻文
第二年級：仏語羅訳、羅語仏訳、希語仏訳、仏語希訳、羅語韻文、
修辞学級：羅語仏訳、希語仏訳、羅語韻文、仏語模擬演説、羅語模擬演説
哲学級：仏語作文、羅語作文

それぞれの試験には題目や問題（matière）が準備されており、試験当日、生徒はソルボンヌにて、早朝六時から夕方五時まで古典語との格闘が強いられた。題目は毎年異なるが、宗教、歴史、教育や社会道徳に関するもの、または古典作家からの抜粋などが用いられた。例えば、1837 年の題目には、「魂の不滅性について」（修辞学級、羅語仏訳）、「創造主の力と知恵について」（第二年級、仏語希訳）、「ウォルター・ローリーから裁判官へ」（修辞学級、仏語模擬演説）、「バイアにおける噴火」（第二年級、羅語韻文）、「翻訳を幼稚な仕事と見做す誤りについて」（第四年級、仏語羅訳）などの題目のほかに、ウィトルウィウス（第二年級、羅語仏訳）、テオグニス（第四年級、希語仏訳）、小プリニウス（第四年級、羅語仏訳）からのテクストが準備されていた。

そして、それぞれの試験に対して、一等賞と二等賞の正式な賞（prix）があり、その下に一位から最高八位までの准賞（accessit,「最も近づいた者」）が準備されていた。つまり、一つの試験に対して、最大 10 人まで表彰されることになっていた。なお、学校内の学期末に行われる表彰式などでも基本的に、同様の順位で賞が与えられていた。

ボードレールがルイ・ル・グラン王立コレージュの修辞学級に在籍し、コ

---

[30] その他、特に理系の科目は年度によって異なり、必ずしも安定しない。以下は 1837 年の例である。
第六年級：歴史・地理、博物学
第五年級：歴史、博物学
第四年級：歴史、算数、
第三年級：歴史、地理
第二年級：歴史、天文学、化学
修辞学級：歴史、天文学
哲学級：応用数学、物理学（1 年目）と（2 年目）、基本数学

ンクール・ジェネラルにも挑んだ1838年の学校の様子が視学総監によって以下のように記録されている。

> 教育の水準は高い。しかし、優秀な生徒向けであって、すべての生徒のための教育ではない。コレージュの名誉のための教育であって、どのような成績の生徒に対しても負っている義務を履行するための教育ではない。［…］皆、コンクール・ジェネラルのことしか考えていない。それが主要な関心である。それがコレージュの魂なのである[31]。

パリの中等学校では、優秀な一部のエリート、つまりコンクールで賞を狙える一部のエリートのための教育がなされており、大部分の生徒が無為に7年から10年中等学校で過ごすことが疑問視されていた。教師が生徒全員の宿題ではなく、出来の良い宿題のみを添削するという習慣があったことからも、エリート主義的な教育の一面が窺えよう。

ボードレールは、賞を狙える一部の優秀な生徒に属しており、第三年級の時に、羅語韻文にて二位准賞、第二年級の時に、羅語韻文にて二等賞、羅語仏訳にて八位准賞を獲得している[32]。ただし、修辞学級ではなぜか賞も准賞も得ていない。修辞学級に在籍していた1837年末、あまりにも加熱する競争に嫌気が差し、ボードレールは仲間たちと校長に反抗してコンクール・ジェネラルに選出された生徒のために夜中の10時から11時に行われる特別講義の中止を訴えたこともあった。また、ボードレールには、校長の命で、修辞学級を危うく留年させられるところであったが、辛うじて哲学級へ進んだ経緯がある。この頃、彼にとって「神託[33]」の如き存在であったリン先生と文学について語り合い、友人たちとの会話が「無用で退屈[34]」とも感じていたボードレールにとっては、修辞学級が一つの転換点になっていたのではないだろうか。しかし、これはまた別の場で検討すべき問題だろう。

---

[31] Archives nationales, F/17/H 78486, cité dans Gustave Dupont-Ferrier, *La Vie quotidienne d'un Collège parisien pendant plus de 350 ans, Du Collège de Clermont au Lycée Louis-le-Grand, 1563-1920*, Boccard, 1922, t, II, p. 411.

[32] Claude Pichois, Jean Ziegler, *Charles Baudelaire, nouvelle édition*, Fayard, 1996, p. 99では第二年級の羅語仏訳が« 2e accessit »となっているが、これは単なる« 8e accessit »の誤記と思われる。Baudelaire, *Correspondance*, éd. cit., t. I, p. 709, « 8e accessit »となっている。なお、コンクール・ジェネラルの成績に関しては、以下の文献を参照した。Université de France, *Distribution générale des prix aux élèves des collèges de Paris et de Versailles, année 1837*, Imprimerie royale, 1837, p. 33.

[33] Lettre au Colonel Aupick, le 17 juillet 1838, Baudelaire, *Correspondance*, éd. cit., t. I, p. 59.

[34] Lettre à Madame Aupick, environ 10 juin 1838, Baudelaire, *Correspondance*, éd. cit., t. I, p. 52.

いずれにしても、パリの王立コレージュがコンクール・ジェネラルを独占することによって、地方の王立コレージュとは常に別格の扱いを受けた。1864年になって当時の文部大臣ヴィクトール・デュリュイは県のコンクール・ジェネラルを設置したが、パリと地方が交わることはなかった[35]。そのため、サント=ブーヴやボードレールの事例のように、修辞学級はパリの王立コレージュで修めたいと願う学生や、子供をパリの修辞学級へ編入させたいと希望する親も多くいた。また、この選抜試験の持つ重要性によって手段と目的が逆転し、コンクール・ジェネラルのための中等教育という構図さえ出来上がっていた。当時、バカロレア試験は、まだそれほどの権威を持っておらず、その試験科目は中等教育の内容とも完全に一致していたわけではなかった。パリにはボードレールを含む多くのエリートが集中し、後世に名を残した人物の多くがパリの中等教育を経たという事情から、一般的に19世紀の中等教育と言う時、パリでコンクール・ジェネラルを中心にして行われていた教育を指すことが多い。また政府の発令する教育計画もパリの中等学校を念頭に置いている場合が多かったことを考えれば、「中等教育＝パリ」という考え方は自然であり、文学と教育の関係を探る際は、第一にその教育内容を検討する必要がある。しかし、19世紀の詩人や作家全員がパリで学校教育を受けたわけでもなく、すべての中等教育を十把一絡げにすることもできない。パリで行われていた教育は氷山の一角にしか過ぎなかったということも忘れてはならないだろう。

中等教育の代表は間違いなく、5校の王立コレージュと複数の私立コレージュを擁するパリであったが、底辺にある312校の公立コレージュはどのような状況であったのか。中等教育と呼ばれるからには、パリ同様、古典語の教育が中心になることはすでに確認した。しかし、その教育水準は地方によって大きなばらつきがあり、パリと地方の王立コレージュのあいだにある差よりも格段に大きな違いがあったことが察せられる。実際、王立コレージュと公立コレージュを同じ中等教育という枠組みの中で捉えるようになったのは1840年代からであり、ナポレオンがリセを創立した当初は、リセと公立コレージュは別の組織図に属していた[36]。1865年において、大多数の公立コレージュの生徒数は一クラス10人弱であったのに対して、パリの王立コレージ

---

[35] 1864年5月28日のデクレ。なお、パリと地方の区分が正式になくなり、フランス全土のリセが同じ試験を受けるようになったのは1923年からのことである。

[36] 詳しくは、André Chervel, « De quand date l'enseignement secondaire ? », *La Culture scolaire. Une approche historique*, Belin, 1998, p. 149-159.

ュには 60 人以上のクラスもあった。1838 年の『公教育及び聖職者教育の特別新聞』には以下のように記されている。

> 今日の公立コレージュは、すべて同じ名称で呼ばれているが、非常に多様な学校の集まりである。一方の学校では王立コレージュと同じように、ある程度申し分のない方法で文学及び科学の教育がなされている。他方、より水準の低い学校もあり、そこでは年級は混合されていることがあまりに頻繁で、科学と文学の中途半端な教育しかなされていない。さらに、ある分野の教育はできても、違う分野が不十分または、まったくない学校もある[37]。

実際、優秀な生徒の王立コレージュへの奨学金、場合によっては家屋の譲渡、そして 1845 年から一部の公立コレージュに国からの援助金が支払われたが、それ以外に国家からの援助はほとんどなく、教師の水準も低く、生徒も集まらない苦しい状況に陥っていた学校が多くあった。後述するが、1860 年代後半になって、公立コレージュの中には、入学者数を増やすために古典語を中心にした中等教育を捨て、実学を重んじる「専門的中等学校」に変身するケースも出てくる。シャンフルーリの小説にも、七月王政下にて生徒集めに苦労をする小さな町の公立コレージュが、聖職者による初等教育と競争関係にあったことが描かれている[38]。

このように国公立の中等学校は、(1) パリの王立コレージュ、(2) 地方の王立コレージュ、そして (3) 公立コレージュという三段階に分けられたピラミッド構造になっており、コンクール・ジェネラルや経済基盤を背景に明確な線引きがなされていた。また、地方の王立コレージュの内部も三階級に分けられており、公立コレージュに関しては、学校間の教育水準にかなりの幅があった。ただし 19 世紀の中等教育の種類を国公立機関にのみ限定してしまうなら、片手落ちになる。というのも、国公立の中等学校に対して、一種のライバル関係にあり、時期によってはそれらを超える生徒数を擁した私立の中等学校があるからである。

4. 私立の中等教育

国公立の学校と私立の学校という対決の構図は、そのまま国家と教会のあいだの権力闘争の縮図でもあった。以下、ごく簡潔にその内容を辿る。フランスでは、もともと教育を司っていたのは教会や修道会であったが、教育界

---

[37] *Gazette spéciale de l'instruction publique et du clergé*, le 4 août 1838.

[38] Champfleury, *Les Souffrances du professeur Delteil* (1857), Ressouvenances, 1998.

で大きな勢力を持っていたイエズス会の追放が 1762 年に決定されてから、国家の本格的な介入が開始される。革命後、啓蒙主義的思想を支柱に作られた「中央学校（École centrale）」は、あまりにも過激な反動的方針のために支持を得られず、短命に終わる。その後に登場したナポレオンは、科学的な教育を取り入れつつも、古典的教育を復活させた。その際彼は、国の監督権の強い中央集権的な大学機構を作り上げ、私立の学校に対して様々な制限を設け、その発展を阻止しようとした。教育の独占を狙ったナポレオン学制の誕生である。以来、国家と教会の対立が学校教育の中にも持ち込まれ、教育内容、規制、生徒数をめぐる熾烈な争いが繰り広げられる。なお、国家の統制に反対する自由主義者たちも、教育の独占体制に反対したことは言うまでもない。具体的に、彼らは学校の開設に必要な承認、視学による監察、そして何よりも、時に収益の半分以上に相当する負担金と、バカロレアの受験に必要な国公立コレージュで修辞学級と哲学級を学んだことを証明する「学業修了書」などの廃止を求めた。最終的には、教育の自由を求めた闘争は 1850 年のファルー法のもとで教会の勝利に終わり、ナポレオンの作った教育の独占体制は形骸化する。

このような闘争の只中にあった七月王政期の私立中等学校だが、他の中等学校と同じように、寄宿寮も備えている（1）アンスティテュション、（2）パンション、そしてイエズス会やオラトリオ会などの修道会が運営する（3）小神学校（petit séminaire）の三種類があった。小神学校については後述するが、アンスティテュションとパンションは、上記の規制などを守る必要があったので、制度的には教師は公教育の一員とみなされていた。アンスティテュションとパンションを区分するものは、生徒数、教育レベル、修辞学級や哲学級などの上級クラスを所有しているか否かの点であった。宗教と道徳教育の内容、および教育内容のレベルが公教育王立評議会に認定されれば、アンスティテュションは「全学級コレージュ（collège de plein exercice）」に身分を変えることが許された。つまり、私立コレージュである。この基準を満たしたのは、パリではスタニスラス中等学校とロラン中等学校だけであったが、そのお陰でこの二校は権威あるコンクール・ジェネラルに参加することができた。前者はパリで最も古く権威のある私立コレージュの一つであり、アナトール・フランスも通い、政経界に多くの人材を提供した。アルフレッド・ド・ヴィニーがアンスティテュション・ヒックスで過ごしたように、その他の詩人や作家も決して私立の中等教育とは無縁ではなかった[39]。

[39] France-Yvonne Bril et Loïc Chotard, « La Fleur de l'élite : Alfred de Vigny à l'Institution

七月王政期、ブルジョワからは信頼を回復しつつあった国公立の中等教育であったが、一般層においては、なお「神なき教育」を推進した中央学校の精神を引き継ぐものとして認識されており、多くの家庭は旧来の修道院による教育に信頼を寄せていた。1831 年、公教育の生徒数は 39,795 人だったのに対して、私立の学校には 24,658 人の生徒が通っていた。さらに 1842 年の統計によると 国公立の 45,282 人に対して私立 31,316 人と、公教育がまだ優位を占めていた。私立の学生が国公立の学生を上回るようになるのは、1850 年に中等教育の自由を認めたファルー法以後のことである[40]。ただし、上の数字は、小神学校を含んでいない点で不十分であろう。19 世紀を通じて、小神学校を国による監理の対象にするかどうかは、常に問題とされていたことである。というのも小神学校は、本来は聖職者の養成を目的としながら、実質的には中等教育と同等の教育を一般人に施していたからである。王政復古期には、着実に生徒数を増やし、本来は教育を許されていない非公認のイエズス会が勢力を拡大しつつあり、公教育を脅かす存在となっていた。そのため、1828 年 6 月 16 日の勅令によって、改めて非公認のイエズス会による教育の禁止が定められ、小神学校の生徒数は 2 万人を超えてはならないと規定された。なお、この小神学校には七月王政期初頭には約 15,000 人以上の生徒が通っていたとされている[41]。私立の中等教育を考える際には、教会に所属する中等学校であった小神学校を無視することはできないのである。

ただし、1852 年の時点ではなお、まだ世俗の人や組織によって経営される私立学校の方が、宗教関係者によって経営される私立学校よりも多かった。また、アンスティテュションの多くは王立コレージュに生徒を通わせており、国公立の学校と密接な関係を持っていたことを考えれば、国公立対私立の構図を国対教会の対立のみに還元してしまうことも出来ない。パリのシャルルマーニュ王立コレージュとブルボン王立コレージュは寄宿寮を持たない中等学校だったので、ほとんどの生徒はアンスティテュションかパンションから通っていた。そのシャルルマーニュ王立コレージュに付属するファヴァール、マサン、ジョフレ、ヴェルドが、そしてブルボン王立コレージュでは、ベラジュ、カレ・ド・マイイ、ランドリが[42]、コンクール・ジェネラルやグラン

Hix », *Association des amis d'Alfred de Vigny, Bulletin*, n° 24, 1995, p. 44-58.

[40] 生徒数は、Antoine Prost, *Histoire de l'enseignement en France 1800-1967*, Armand Colin, 1968, rééd. 1979, coll. U, p. 45. による。

[41] *Ibid.*, p. 32.

[42] サント=ブーヴは、ブーローニュ＝スール＝メールにあるアンスティテュション・ブレリオに 1813 年から 1818 年のあいだ通った後、パリのアンスティテュション・ラ

ドゼコールでの功績者を出したアンスティテュションとして有名であった[43]。ただ、当時の最も有名なアンスティテュションとしては、やはりサント=バルブを挙げるべきだろう[44]。1866 年当時、この学校は 1250 名の生徒を擁し、その一部がルイ・ル・グランへ通っていた。アンスティテュションにとっては、出身生徒の成績によって評判が大きく左右され、入学者数にも影響したため、優秀な生徒には寄宿寮の費用を割引するなどして、良質の生徒を集めることに必死になっていた。コンクール・ジェネラルの競争は、コレージュ外にも飛び火していたのである。

なお、19 世紀の中等教育においては、寄宿寮へ入ることが一般的であり、ボードレールも 10 歳にシャルルマーニュ王立コレージュへ入ってからは、一度も家へ戻ることはなかった。ボードレールが修辞学級を過ごした 1837 年から 1838 年度のルイ・ル・グラン王立コレージュでは、49.5 パーセントが学校内の寄宿生、40 パーセントが私立のアンスティテュションかパンションから通う外部の寄宿生、残りの 10.5 パーセントが自由通学生であった[45]。つまり 90 パーセント近くの生徒が寮生活をしていたわけで、中等学校へ行くことは親元を離れて寄宿舎へ入ることを意味していたのである。それはまた、当時の社会通念として、修道院型の規律と外界から隔絶された空間が教育の場として相応しいと認識されていたからでもあった。

以上のように、19 世紀の中等教育には、国公立から私立そして、小神学校に至るまで様々な種類とレベルがあり、それぞれの学校にはそれぞれの政治的思惑と社会的要請が働いていた。ここまで、主として七月王政期における初等教育と中等教育の差、そして国公立と私立の中等教育の多様性を確認してきたが、最後に、経済的繁栄にともなう新しい社会階級の中等教育への進出がこのような制度にもたらした変化を扱いたい。

ンドリに滞在しながら、1821 年に修辞学級を終らせるまでシャルルマーニュ王立コレージュへ通った。その後、ブルボン王立コレージュへ籍を変えて、1822 年のコンクール・ジェネラルではラテン語韻文では一等賞、ラテン語模擬演説にて二位准賞を得ている。

[43] 詳しくは Victor Chauvin, *Histoire des lycées et collèges de Paris*, Hachette, 1866, p. 173-204.

[44] ボードレールの実父フランソワ・ボードレールは、サント=バルブに在籍し、コンクール・ジェネラルで優秀な成績を収めたことによって、この学校の修辞学の補習教師になっている。

[45] Gustave Dupont-Ferrier, *La Vie quotidienne d'un Collège parisien pendant plus de 350 ans, Du Collège de Clermont au Lycée Louis-le-Grand, 1563-1920*, Boccard, 1922, t, II, p. 83.

5. 初等教育と中等教育の狭間・実学中心の中間教育

1820年代から、フランスの教育制度には大きな欠陥があることが徐々に浮き彫りになってくる。それは、読み書き計算と道徳教育を基本とする初等教育と、古典的人文教育が中心の中等教育のあいだに連関がなく、大きな空隙が広がるばかりであったことである。というのも、フランス革命によって大打撃をうけた中等教育は、生徒数を著しく減らしたが、この傾向は王政復古期から少しずつ反転し、七月王政期にはようやく革命前の水準に服した。しかし、その生徒の中には、産業と経済の活性化によって富を得た下層ブルジョワのみならず、農家や商人の子弟も多く含まれていた。彼らにとっては、古典的人文教育は何の役にも立たないものであったが、初等教育では満足しない親の上昇志向によって子供は中等教育へ送られることになる。1831年、ちょうどボードレールが中等教育へ入った当時の状況はどのようなものであったか。少し長くなるがヴィクトール・クザンの報告によると以下の通りである。

> フランスにおける初等教育は、実に取るに足りないものである。そして、初等教育とコレージュの教育のあいだには何もない。そこで、ブルジョワ階級の下層部にいたるまで、適切な教育を子供に与えようという誠実な動機をもつ父親たちは、皆、子供をコレージュに送ることによってしか、その望みを達することができない。そこで二つの重大な不具合が生じる。自分が高尚な職業に向いているとはまったく思わないこの若者たちは、概して真面目に勉強をしない。そして、18歳頃、つまらない成績をとった後に、家族の職業としきたりへと戻る。しかし、その日常生活には、過去の学業を思い出させたり、維持させたりするものが何もないため、僅か数年で、学校で学んだわずかばかりの古典的知識も掻き消えてしまう。そして、しばしば、彼らは父親のしがない職業へ戻ることを難しく、ほとんど不可能にしてしまうような交友関係と趣味をコレージュで身につける。ここに、不安を感じる人種が誕生する。彼らは、自分の身分にも他人の身分にも、さらには自分自身にも満足せず、社会秩序の敵となる。彼らは自分の場所にいる気がせず、多少の交友関係、多少の才能、そして、制御のきかなくなった野心を持って、あるいは盲従、あるいは反抗のあらゆる道に身を投げるのである[46]。

これは、先述のラ・シャロテの論理と同じであり、19世紀を通じて、同じ趣旨の主張は尽きることがない。初等教育と中等教育の線引きが社会秩序の安定に寄与すると考えられていたことはすでに確認したが、中等教育に流入し

---

[46] Victor Cousin, *De l'instruction publique dans quelques pays de l'Allemagne et particulièrement en Prusse*, Pitois-Levrautl, 1840, t. I, p. 306-307.

てきた下層ブルジョワに新しい行き場を与えることも、同様の観点から対応の求められる切迫した課題であった。また、何よりも産業革命によってもたらされた科学、運輸、通信などの進歩を推進する教育も必要であった。そこで、現代社会に適応したより有用な教育体制を、新しい階級のために整備することが急務になったのである。

ボードレールの学友が具体的にどのような階級の出身であったかを確定する資料はないが、国立古文書館に残っている資料によると 1823 年、ルイ・ル・グラン王立コレージュに在籍していた 36 名の生徒のうち、4 人が大規模な工場経営者、2 人が司法書士団、3 人が佐官、1 人が法務官、4 人が貴族階級に属していた[47]。1837 年の視学総監の報告によると、同校の生徒は「最も教養があり、社会に最も影響力を持つ[48]」階級に属していた。現実には、中上流階級のブルジョワと裕福な商人が主流であっても、おそらく様々な階級の生徒が混ざっていただろう。

歴代の文部大臣による中間教育の試みとしては、ヴァティムニルが 1829 年に起草した「特別講義」、ギゾーが 1833 年に発案した「上級初等教育」、サルヴァンディが 1847 年に提案した「特別教育課程」、さらに 1865 年にデュルイが実行し、成功を収めた「専門的中等教育」が挙げられる。基本的にそのいずれもが、古典語偏重の教育内容を改め、工業家、貿易商、農場経営に役立つような実学を重視する教育方針を採っていた。特にデュルイは、モン・ド・マルサンのリセを「専門的中等教育」のモデル校に改組し、生徒数の面で苦戦していた公立コレージュも「専門的中等教育」へ改組させていった。そこでは、ラテン語教育はなされず、フランス語、歴史、地理、応用数学、物理、力学、化学、会計、簿記などが教えられた。この改革は、何より社会の需要に応えた点で成功を収め、1868 年には、リセに約 7,000 名、公立コレージュに約 18,500 名もの生徒を数えるようになった。実に国公立の中等学校の生徒数の全体の 4 分 1 近い数字であった[49]。

ただし、デュルイによる実学重視の教育改革の成功は、ボードレールの目から見れば、「現代的愚行」にしか過ぎなかった。晩年のボードレールは、

---

[47] Archives nationales F/17/H 3150, cité dans Gustave Dupont-Ferrier, *La Vie quotidienne d'un Collège parisien pendant plus de 350 ans, Du Collège de Clermont au Lycée Louis-le-Grand, 1563-1920*, Boccard, 1922, t, II, p. 86.

[48] Archives nationales F/17/a 78486, cité dans Gustave Dupont-Ferrier, *La Vie quotidienne d'un Collège parisien pendant plus de 350 ans, Du Collège de Clermont au Lycée Louis-le-Grand, 1563-1920*, Boccard, 1922, t, II, p. 87.

[49] 梅根悟（監修）、『世界教育史体系 10・フランス教育史 II』、講談社、1975 年、p. 107-108.

ベルギーで行われている同様の実学重視の教育を目の当たりにして、「ラテン語なし、ギリシア語なし。職業教育。銀行家をつくる。詩への嫌悪。ラテン語学者は劣った実業家になるというのか[50]」と批判をしている。さらに、1864年11月18日のアンセル宛の手紙では、「私に良く分かったことは、文学教育がひどいものだったということ。また、〔文学教育に比べれば〕若者たちが受ける科学教育のほうが一般にましだということである。ラテン語はない。哲学もない。物理・化学が多い。これは私が現代的愚行、デュルイ派と呼ぶものだ[51]」と記している。ラテン・ギリシアの古典文学を徹底的に教え込まれたボードレールにとって、文学よりも科学を重視した実用性を求める教育は、有用性のみを追い求める現代病の一つとして目に映ったのではないだろうか。しかし、その実学重視の指向は、フランスの古典教育をも少しずつ蝕んでおり、ジュール・フェリーによる改革を経て、ラテン語・ギリシア語のない教育へと着実に向かって行く。

結語

以上、ボードレールが中等教育を受けた七月王政期を軸に19世紀の教育制度、その中でも特に中等教育の大枠と、それを成立させた政治的、社会的要請について記した。これは、文学研究の枠を超える側面だが、このような巨視的な視点を据えておくことは、具体的に詩人や作家が受けた教育の内実と、それが文学の創造とどのように関係するのか検討するに先立って必要な前提となるはずだ。

修辞学の教育などは、中世の大学からイエズス会のコレージュを経た長い伝統に裏づけられつつも、時代の要請に即して少しずつその姿を変えているのも事実である。当時、教育には社会秩序の安定という機能が想定されており、その制度と内容にこの課題が大きく反映されていたことは確認できた。本論では具体的な教育内容まで入ることは出来なかったが、このような基本方針が規範文学の創造にまで影響を与え、特に文学における「道徳」の重要性が強調されるようになる。そのような文学観から『悪の花』の有罪判決までは、そう遠くはない。

---

[50] Charles Baudelaire, *Fusée, Mon cœur mis à nu, La Belgique déshabillée*, éd. André Guyaux, coll. Folio, 1986, p. 202.

[51] Lettre à Narcisse Ancelle, le 18 novembre 1864, Baudelaire, *Correspondance*, éd. cit., t. II, p. 423.

また、19 世紀の文学教育は、時間割や作家の指定、教科書の選定や試験題目などを通して規範文学を形成していったが、それがロマン主義との闘争の中で行われた側面は看過できない。また、規範化の運動そのものも、時代の要請に応じて、時には反動的であったり、時には革新的であったりしている。特に、フランス語で書かれた文学に対して、ラテン文学からの自立性を認め、学校でもきちんと教育されるべきだという流れが現れるのが 19 世紀後半からである。文学の規範化自体が複雑な様相を呈しているのだが、ボードレールの世代は、ロマン派の文学が敵対した規範文学を学びつつも、学校の枠外でその規範文学に反旗を翻した新しい文学にも親しんでいる。換言すれば、一見相反する二種類の文学を同時に経験した世代であった。周知の如く、ボードレールは後者の系譜に連なる文学を創造していくことになるのだが、ラテン語、古代文明などに対する嗜好、また実用性を軽視する姿勢において前者との関係は完全に断たれたわけではなかった。

以上を念頭に置き、規範文学の創造や文学教育の具体的な内容、そしてその受容に大きく影響したであろうコレージュ内の規律や実際の学校生活などに関する調査を進めることが、今後の課題となる。